

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520397

研究課題名（和文） 名詞句に関する東アジア言語を主とする比較統語論的研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Noun Phrases in East Asian Languages

研究代表者

宮本 陽一（MIYAMOTO YOICHI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：50301271

研究成果の概要（和文）：

中国語の関係節と数詞を含む名詞句において、関係節が数詞に先行する場合は関係節が名詞句削除を認可するが、後続する場合は関係節が名詞句削除を認可できない母語話者がいる事実から、中国語の関係節が Kayne (1994) の主張する構造ならびに NP に付加される 2 種類の構造を許すことを明らかにした。また、日本語の関係節は名詞句削除を認可することはなく、NP に付加される構造のみを許すことを明らかにした。Takahashi (2011) は、日本語の関係節も名詞句削除を認可すると主張しているが、本課題では、名詞句削除を認可しているように見える場合は、代名詞の「の」が関係節を伴っていると考えるべき証拠を挙げた。本課題では、主要部後置型言語が深層構造において一律の構造を持つわけではないと主張する Saito, Lin, and Murasugi (2008) を支持した結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：

This study argues that Chinese makes use of adjunction to NP, as well as Kaynean (1994) head-raising, in order to form relative clauses. This proposal is based on the hitherto unobserved phenomena that Chinese relative clauses can trigger NP-ellipsis when they precede a numeral quantifier (NQ), but they cannot when they follow an NQ, which is the case for at least some native speakers of (Mandarin) Chinese. By way of contrast, the study also shows that Kaynean head-raising is not allowed in Japanese, contrary to Takahashi (2011), who claims that Japanese permits Kaynean head-raising in relative clause formation. The study concludes that nominal architecture is not uniform across head-final languages, thereby supporting Saito, Lin, and Murasugi (2008).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：名詞句・N'削除

1. 研究開始当初の背景  
名詞句の構造に関する研究については、

Watanabe (2006) が自然言語の名詞句は一律、(1) の構造を持つと提唱している。

- (1) [DP .. [QP .. [CaseP .. [NumP .. [NP .. ]]]]]

Watanabe の分析において、主要部前置型言語と主要部後置型言語の違いは、名詞句内における移動の有無に起因され、数詞がどの言語においても Number Phrase (NumP) (もしくは Classifier Phrase (CLP)) に生成されるのである。

これに対し、Saito, Lin, and Murasugi (2008: SLM)においては、中国語が(2)の構造、日本語が(3)の構造を持つと主張されている。

- (2) [DP .. [NumP .. [CLP .. [NP .. ]]]]

- (3) [DP .. [NumP .. [NP [CLP ..] [N' .. N ]]]]

2つの構造の異なる点は、数詞 (CLP) が中国語では NumP の項に、日本語では NP の修飾語の位置に生成されていることである。この仮説を支持する証拠として、SLM は N' 削除を挙げている。日本語では、(4)が示すように数詞が N' 削除を認可することはないが、中国語では、(5)のように N' 削除が可能である。

- (4) \*太郎は三冊の本を買ったが、花子は五冊の~~本~~を買った。

- (5) Suiran Zhangsan mai-le [san-ben though buy-PERF three-CL shu], dan Lisi mai-le [wu-ben ~~shu~~] book but buy-PERF five-CL book  
'Zhangsan bought three books, but Lisi bought five.'

N' 削除が指定部-主要部一致 (SPEC-Head Agreement) によって誘発されると仮定すると、中国語では数詞が指定部に生成されるために主要部との一致が得られるが、日本語では数詞が付加詞であるため主要部との一致が起らず、この2言語間の差が生じると説明できる。

更に、Miyamoto (2009)は、(6)において(7)の解釈が許されるのは、(8)に示したように「二冊ずつの」が関係節を形成し、NP に付加されているためであると主張している。

- (6) 太郎が二冊ずつの本を買った。

- (7) Taroo bought the books in twos.

- (8) [NP [Relative Clause 二冊ずつの] 本]

この分析をもとに、Miyamoto は(9)において「二冊ずつの」の右側に位置する「六冊の」

も NP 内に生成されていると結論付けている。

- (9) 太郎は二冊ずつの (計) 六冊の本を買った。

SLM によれば、数詞は NP 内に生成されるわけであるから、これは驚くことではない。

## 2. 研究の目的

本研究は、比較統語論の立場から名詞句内における修飾語句 (特に関係節) の関わる現象、特に N' 削除を詳細にわたり検討し、東アジア言語における名詞句内の機能範疇の有無、更にその特徴・働きを明らかにする。この結果を踏まえ、東アジア言語、しいては自然言語一般の名詞句の統語構造、特に名詞句内の Left Periphery に関して示唆を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

研究方法は、次の3ステップに分ける。

### ① 個別言語の記述

Aoun and Li 2003 ならびに Huang, Li, and Li 2009 が中国語の N' 削除に関する認可条件を提唱している。更に、日本語の N' 削除に関しても、Kadowaki (2005)が *pro* に基づく分析を提唱している。指定部-主要部一致によって N' 削除が誘発されるとする仮説のもとで名詞句構造の解明を行うためには、これらの N' 削除に関する先行研究の再検討が欠かせない。

### ② 比較対象研究

①における研究成果をもとに、(10)と(11)/(12)の文法性の差を説明するために、比較統語論的な立場からデータの整理を行う。

- (10) [[Wo zuotian kanjian] de nanhai]  
I yesterday see de boy  
bi [[ni zuotian kanjian] de ~~nanhai~~]  
than you yesterday see de boy  
geng youqian  
more rich  
'The boy I saw yesterday is richer than the boy you saw yesterday.'

- (11) \*太郎が昨日会った人はやさしいが、花子が昨日会った~~人~~は怖い。

- (12) \*The person Taroo saw yesterday is kind, but the ~~person~~ Hanako saw yesterday is scary.

(SLM 2008: 263)

SLM は、Simpson (2002)の Kayne (1994)に基づく分析を採用し、中国語では関係節が指定

部-主要部一致を誘発できるのは、関係節に当たる Tense Phrase (TP)が *de* に関わる音韻上の制約から DP SPEC に移動するためであると考えている。では、Aoun and Li (2003)ならびに Huang, Li, and Li (2009)が指摘していることであるが、なぜ主要部によって N'削除が認可できない場合が存在するのであるのか。この点を含め、比較統語論的な立場から関係節が牽引する N'削除の特性を明らかにする。

### ③ 理論的研究

①ならびに②の研究成果を踏まえ、生成文法、特にミニマリストプログラムの枠組みにおいて、関係節が牽引する N'削除に関する理論的な説明を試みると同時に、名詞句の構造に関して理論的な帰結を求めらる。

### 4. 研究成果

名詞句の構造解明のために、まず、中国語において関係節が N'削除をどのような統語環境において牽引できるのかを明らかにするために、(13)と(14)に例を挙げた、数詞と関係節の語順に焦点を当てた。

(13) Lisi diu-le [Zhangsan mai] de  
dump-PERF buy de  
[liang-ben] shu, Huazi diu-le  
two -CL book buy-PERF  
[Tailang mai] de [liang-ben] shu.  
buy de two -CL book  
'Lisi threw away the two books that  
Zhangsan bought. Huazi threw away the  
two books that Tailang bought.'

(14) Lisi diu-le [liang-ben]  
dump-PERF two -CL  
[Zhangsan mai] de shu, Huazi  
buy de book  
diu-le [liang-ben][Tailang mai] de  
dump-PERF two -CL buy de  
shu.  
book  
'Lisi threw away the two books that  
Zhangsan bought. Huazi threw away the  
two books that Tailang bought.'

(13)と(14)はともに文法的である。ここで、中国語の関係節が一律に DP SPEC に上昇移動するとなると、(2)の構造においては、関係節が常に数詞に先行することになり、なぜ(14)の語順が容認されるのか説明ができない。

よって、(14)が文法的である事実は、中国語の関係節が Kayne (1994)タイプと数詞に後続できるタイプに分けられることを示しているのである。本課題では、この数詞に後続する関係節は NP に付加されると考える。関係

節に、これらの2タイプが許されることは、N'削除の可否によって支持される。以下に示すように、(13)と(14)における *shu* 'book'を削除すると文法性に差が生じる。

(15) Lisi diu-le [Zhangsan mai] de  
dump-PERF buy de  
[liang-ben] shu, Huazi diu-le  
two -CL book buy-PERF  
[Tailang mai] de ([liang-ben]) ~~shu~~.  
buy de two -CL book

(16) ??/\*Lisi diu-le [liang-ben]  
dump-PERF two -CL  
[Zhangsan mai] de shu, Huazi  
buy de book  
diu-le [liang-ben][Tailang mai] de  
dump-PERF two -CL buy de  
~~shu~~.  
book

(15)が文法的であるのに対し、(16)は母語話者の間で判断が分かれる。

(15)において N'削除が容認される事実は、DP が NumP および CLP よりも高い位置を占めるとする、(2)の構造を仮定することにより、指定部-主要部一致に基づく N'削除の分析から導きだせる。これに対して、(16)は先に述べたように、この語順が導きだせないだけでなく、母語話者の判断が分かれることも問題になる。

まず(16)を容認しない母語話者の場合は、数詞が CLP にあるため、関係節は必然的に NP に付加されなければならないことになる。この場合、指定部-主要部一致を起こすことはできないので、N'削除が許されないことを導きだせる。

更に、(2)の構造と指定部-主要部一致が N'削除の認可条件であることを維持し、(16)において *shu* が削除できる事実を説明するためには、この例文においても関係節は DP SPEC に上昇移動していると考えなければならない。これが正しいとすると、数詞は CLP に生成されているとは考えられないことになる。本課題では、(16)を容認する母語話者は、数詞を Cheng and Sybesma (1999)が *massifier* と呼ぶ関係節を形成していると考えられる。よって、この場合の数詞の構造は、(17)になる。

(17) [CP Op<sub>i</sub> [SC t<sub>i</sub> [CLP liang [CL ben]]] (de)]

数詞が関係節を形成できるのであれば、DP に付加され、DP SPEC に移動した関係節に先行することが可能になる。この分析を指示す

る証拠として、(17)に括弧で示したように、この場合の数詞は *de* を伴うことを許すはずであるが、(16)を容認する母語話者は、実際、(18)も容認した。

- (18) ??Lisi diu-le [[liang-ben] de]  
dump-PERF two -CL de  
[Zhangsan mai] de shu, Huazi  
buy de book  
diu-le [liang-ben] de  
dump-PERF two -CL de  
[Tailang mai] de ~~shu~~  
buy de book

まとめると、中国語の関係節には、SLM の主張する Kayne タイプと NP 付加タイプの2種類の生成方法があることを本課題では明らかにした。[詳細は Miyamoto (to appear)を参照のこと。]

さて、名詞句においては主要部後置型言語である中国語の関係節が N'削除を許すのであるから、日本語においても同様の観察があっても驚くことではない。SLM は(11)の非文性から日本語の関係節は N'削除を許さないと結論付けている。これは、中国語の関係節と異なり、日本語の関係節には DP SPEC に移動する要因がないからであると考えられる。従って、NP 付加の可能性しか日本語には残されていないのである。しかしながら、Takahashi (2011)は、中国語同様、日本語の関係節も N'削除を許すと主張し、(19b)のような例文を挙げている。

- (19) a. 昨日行われた手術は簡単だったが、  
今日予定されている手術は難しい。  
b. 昨日行われた手術は簡単だったが、  
今日予定されているのは難しい。

ここで注目すべき点は、(11)と(19b)の違いである。(19b)では、関係節に「の」が付いている。Takahashi は、この「の」は属格であり、(19b)においては「手術」が削除されていると主張する。これは、抽象名詞を代名詞の「の」で置き換えることはできないという Kamio (1983)の制約に基づいている。よって、日本語において関係節が N'削除を容認するかどうかを確認するためには、この「の」を詳細にわたり分析する必要がある。

本課題では、Murasugi (1991)同様に、関係節に付く「の」は属格ではなく、代名詞の「の」であると考え。ここでは2つ証拠を紹介する。[詳細は Miyamoto (2013)参照のこと。]

まず、削除操作には、通常、統語的・意味的

な平行性が要求されるが、Takahashi が主張する N'削除の現象の場合、先行する文が存在しなくとも削除が可能である。(20)がこの例文に当たる。

- (20) 山田さんが提案したのは、どう思った。  
難しすぎるよな。

会議等に参加したメンバーの会話であれば、(20)は何の問題もない文である。状況から「の」の内容が明らかになるということは、まさに代名詞の特徴を示しているということである。

ここで、関係節に付く「の」が代名詞であるとする、Kamio (1983)の制約は、どう考えれば良いのであろうか。ここで(21)と(19b)の対比がヒントを与えてくれる。

- (21) \*花子が先生に見せた態度はいいが、  
太郎が(先生に)見せたのはよくない。

この2つの文で使われている、いわゆる抽象名詞の違いは、次のような差に現れる。

- (22) a. \*そのふたつの態度は、性質が全く異なるからだ。  
b. そのふたつの手術は、性質が全く異なるからだ。

(22)の対比で示したように Takahashi が挙げるような例文においては抽象名詞で表されている事象を数えることができる。つまり、(21)の「態度」とは異なり、(19b)の「手術」は、「ユニット」を構成しており、典型的な抽象名詞の例として扱うことはできないのである (Quirk, Greenbaum, Leech, and Svartvik 1985)。「ユニット」の概念を踏まえ、Kamio (1983)の制約も、(23)のように考えるべきであろう。

- (23) ユニットの指さない「純粋な」抽象名詞は、代名詞の「の」で置き換えられない。

(23)に基づく、(19b)のような例文において「の」が代名詞ではないとは言い切れないことになる。つまり、日本語の関係節は N'削除を牽引すると考える確固たる証拠はないことになる。

本課題のまとめとして、中国語と日本語はともに主要部後置型言語でありながら、(2)と(3)に挙げた、異なった名詞句の構造を持つという SLM の主張を支持する結果が得られた。本課題は、N'削除が主要部後置型言語におけ

る深層構造を解明する上で有益であることを示した。今後、他の主要部後置型言語に関する再検討が今後の課題になる。

また、関係節の分析に加えて、本課題では、数詞が「ずつ」を伴う場合、「ずつ」を主要部に持つDistributive PhraseがClassifier Phraseを項として選択していると考えられる。このSPECにはDistributive Operatorが生成され、Distributive Keyに移動することにより「ずつ」の解釈が得られるのである。また、この分析を通して、統語的に事象(event)が存在することを明らかにした。更に、日本語の項削除には、PF削除ならびにLFコピーの両操作が必要であると示唆した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Yoichi Miyamoto, On the Unavailability of NP-Ellipsis with Japanese Relative Clauses, *Nanzan Linguistics* 9, 査読無, 2013, 51-83.
- ② Yoichi Miyamoto, On the Event Argument and Anti-Quantifier Zutsu in Japanese, *Nanzan Linguistics* 8, 査読無, 2012, 47-68
- ③ Yoichi Myamoto, On Chinese and Japanese Relative Clauses and NP-Ellipsis, *Nanzan Linguistics* 6, 査読無, 2010, 13-46.

[学会発表] (計8件)

- ① Yoichi Miyamoto, On Numeral Quantifiers with a Distributive Marker, 日本英語学会第28回大会, 2010年11月14日, 日本大学文理学部.

[図書] (計1件)

- ① Mamoru Saito, *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, Oxford University Press, 2013, 最初と最後の頁未定

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

宮本 陽一 (MIYAMOTO YOICHI)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
研究者番号：50301271

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

